

# FIVE KILL

written by HADEYA

## 1

アレクセイ・ゴニチャリンは寒さに身震いした。寒くて寒くて仕方がない。海に面した州都——ウラジオストクの冬は想像を絶する寒さで知られている。今年は例年以上の寒さで平均気温は氷点下を大きく下回っている。これから仕事で外に出ると思うと気が滅入った。

仕事を終わるとアレクセイはいつものバーでウォッカを引っ掛け、序に商売女も引っ掛けた。安モーテルでセックスを終えた後、アレクセイは女に告げた。

「それにしても寒いな」

商売女は言った。

「本当に寒いわね。寒くて寒くて商売も上がったりよ」

アレクセイはコートの襟を立て、吹雪の路地を練り歩いた。路面は雪で凍り付いている。呼吸すると寒気で肺がチリチリ痛む。こんなに寒い夜は初めてかも知れない。急に我が家が恋しくなった。愛妻の待つ、ヒーターの効いた我が家が。

「あんた、ゴニチャリンだろう？」

背後で声がして振り向いた。足音はしない。一体、男はいつ接近したのだろう。

「そうだが」

答えた。男は言った。

「寒い夜だな」

「寒いよ、本当に寒い。寒くて寒くて——」

ヒュッ、と風音がして目の前を何かが横切った。爪先だった。男のブーツにはナイフが仕込んである。

気付いた時には遅かった。首筋がポカポカ温かくなり、生温い血液がドクドク溢れた。

「あ、あ……」

声が出ない。男は続けた。

「魚に宜しくな」

告げて男はアレクセイを橋の下へ突き落した。ジャポン、と水音がしてアレクセイは海底へ沈んだ。

男——イベリオン・ファンクはクールな仕草で手にしているウォッカを煽り、夜の雑踏へ消えた。こうしてファンクの五人殺しのミッションはスタートを切った。

この物語は極寒の地、ロシアを舞台にしたクールな、クールなノアールである。

## 2

昨夜、一人を殺した。今日、立て続けに四人を暗殺する。クライアントはロシア政府。理由は聞いちゃいないし、尋ねない。詮索しない事——業界の常識だ。

\*

精肉工場の冷凍庫で二人目を殺した。ターゲットは寒さにガクガク震えながら命乞いをした。

「たたた頼むよ……ここ殺さないでくれ」

-おおお俺は、こここ答えた。

「駄目だ。貴様を殺す」

容赦なくアキレス腱と動脈を切断し、冷凍庫へ閉じ込めた。血も涙も凍る極寒の部屋へ。

一時間ほど待ってから冷凍庫のドアを開けると案の定、ターゲットは地面に凍り付いていた。その光景と言ったら……。

まるで彫刻だ。アイスの彫刻。作品名、アイス・マン。

何食わぬ顔で遺体を鉄パイプで粉碎してやると精肉工場を出てハンバーガーショップへ入った。

牛肉バーガーを頬張った。車を運転して第三のターゲットの元へ向かう。カーラジオからは無機質なマシンビートが流れている。無機質な無機質なビートが。

殺した、頬張った、運転した。となれば次は乗った、だ。文字通り俺はエレベーターに乗った。ペントハウスのボタンを押し、エレベーターの上昇を気長に待っている。監視カメラを一瞥すると悪寒に囚われた。引き返した方が良さそうだ。何食わぬ顔で途中下車した。

歩いた———昼下がりのウラジオストックを。腕時計を見た———時刻は朝九時。頬張った———牛肉バーガー。時間を潰した———五人を消す為。暇なので二つ目の死体を思い返した。凍った死体は恐怖も凍っていたに違いない。笑った———思わず。憎んだ———世界を。

結論から言えば三人目も殺した。四人目も五人目も殺した。話が飛躍し過ぎだ……もう少し丁寧に説明しよう。一人目は海へ投げた。二人目は凍らせた。三人目は———

家族、皆殺し。

### 3

インターフォンを押すとアットホームなチャイムが鳴った。室内で人の動く気配がする。

「どなたですか？」

訛りの強い女の声。ターゲットの妻だろう。俺は答えた。

「宅配便です」

数センチ、ドアが開いた。その瞬間を見逃さなかった。ワークブーツをドア枠に突っ込み、力任せにドアをコジ開ける。

悲鳴は上げさせなかった。一瞬で首をヘシ折ってやってからだ。続けてガキがノコノコ現れた。御菓子をやる振りを

して壁に叩き付けて殺した。物音を聞いた父親が玄関へ現れ、顔を真っ赤にして怒りを顕わにしている。

「き、貴様！」

一気に懐へ潜り込んだ。男の着ている上着を掴み、大外狩りで倒すと上腕を取り、関節を二つに折ってやった。

「ぎゃあああああ！」

やかましい悲鳴のせいで殺意が込み上げた。マザーファッカーの顔を鉄板ブーツで蹴り上げると負け犬野郎は唇から昨晚の料理と思われる野菜スープを撒き散らした。クソツタレの顔面を血反吐に踏み付け、派手にツイストを踊ってやったさ。それから女房とガキの無残な遺体を見せ付け、眼球を抉ってやった。政府を敵に回すところなんだ。ざまあ見ろ、クソツタレめ。

またしても暗殺を終えた俺は何事もなかったようにペントハウスを後にした。四人目の暗殺へ向けて動き出す。事前に言うておくが、次の殺しは……ヤバイぜ。

#### 4

四人目はパーキングエリアの公衆トイレで殺害した。ドアを蹴破り、バキューンと一発。コメカミから飛散した血と脳漿が壁にイカしたメッセージを刻んでいた。

ケツの穴、と。

#### 5

五人目のターゲットはあんた、だ。名はジョン・ドウ。中肉中背で、どこにでもいる無個性な容姿。

まるで分かつちやいないようだから教えてやる。一体、俺が何者か。

俺は殺し屋だ。クライアントはロシア政府で大統領から多額の報酬を受けている。依頼内容は五人殺しで五人には面識も接点もない。但し一つだけ共通点がある。

革命、だ。

革命的な芸術家である五人は近日、前代未聞の作品を発表する予定でいた。ピカソだの、レオナルド・ナンチャラに匹敵する革命的な芸術作品を。

世界は芸術が変わる。そして芸術家は暗殺される運命にある。俺は五人の作品〈平和への願い〉を阻止すべく政府に雇われたのだ。つまり政府のスタンスはこう言う事になる——平和など知った事か。

五人殺しを通じ、政府は世の芸術家に示したのだ。殺されたくなければ大人しくしてろ、と。

五人目は他ならぬ読者……貴様だ。

覚悟しな、本を読むしか能のない阿呆。貴様の間抜け面に拳骨サイズの風穴を開けてやる。スカスカの脳味噌を吹っ飛ばしてやる。

俺は貴様に銃を向け……。

トリガーを引いた。パン、と銃声がして何かが飛んだ。何か……平和への願いと言う名の芸術作品だった。  
ここに願いは絶たれた、完全に。俺と政府は手を組み、歴史上の全芸術を暗殺したのだ。

ファイヴ・キル——五人殺しの美学。貴様は死んだ。(了)

キリミハデヤ

hadeyakirimi@gmail.com

81-080-9832-0574

モリカワ ケンタロウ 口座番号

三井住友銀行(店番号232) 普通口座 口座番号:7342872